

2023年度 山梨学院大学 卒業時調査報告書

学習・教育開発センター
IR担当：潘秋静・倉澤一孝

1. 調査目的

山梨学院大学は、教育の質的転換を重視する大学として、学生に対して充実した教育を実施することを重要な使命としている。大学教育の質を保証するためには、計画（PLAN）、実施（DO）、評価（CHECK）、改善（ACTION）を繰り返す、PDCAサイクルを有効に機能させることが重要である。

「卒業時調査」は、このPDCAサイクルの中で評価（CHECK）の機能として、学位記授与式において、卒業生を対象に、大学での学修を振り返ってもらうことで、本学が定めた学位授与の方針（Diploma Policy: DP）の達成度を卒業生自身に評価してもらうものである。卒業生の学修成果を把握するとともに、本学の教育活動の有用性やDPに基づく内部質保証の効果について学生から評価を求めることによって、エビデンスに基づき今後の施策を検討することを目的としてこの調査を実施した。

2. 調査期間

2024年3月15日 学位記授与式

3. 調査方法

マークシート及びMicrosoft formsを使って実施

4. 調査項目

- 第1部 卒業後の進路について
- 第2部 大学での学習環境及び教育サービスについて
- 第3部 身につけるべき資質・能力について（DPの達成度）
- 第4部 大学学習全体の有用性
- 第5部 大学教育の総合評価と愛着度について

5. 調査対象

- ✓ 調査対象:全学卒業生 857 名
- ✓ 回答者数:746
- ✓ 回答率:87.0%
- ✓ 有効回答者の構成比率

学部別						
	法学部	経営学部	健康栄養学部	スポーツ科学部	国際リベラルアーツ学部 (iCLA)	全体
回答者数	289	229	34	176	18	746
回答率	82.3%	87.4%	100.0%	93.6%	81.8%	87.0%
未回答数	62	33	0	12	4	111
未回答率	17.7%	12.6%	0.0%	6.4%	18.2%	13.0%
対象者数	351	262	34	188	22	857
割合	38.7%	30.7%	4.6%	23.6%	2.4%	100%

6. 調査結果

3 ページから 12 ページの内容を参照して下さい。

第1部 卒業後の進路について

● 全学部

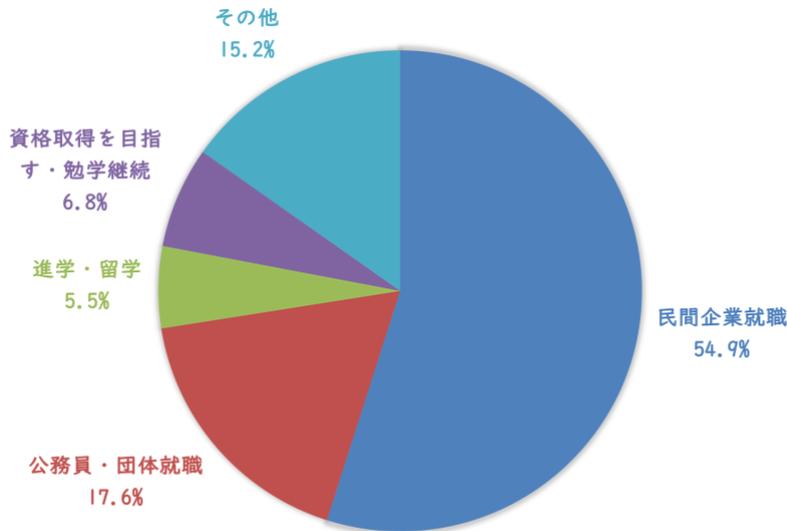
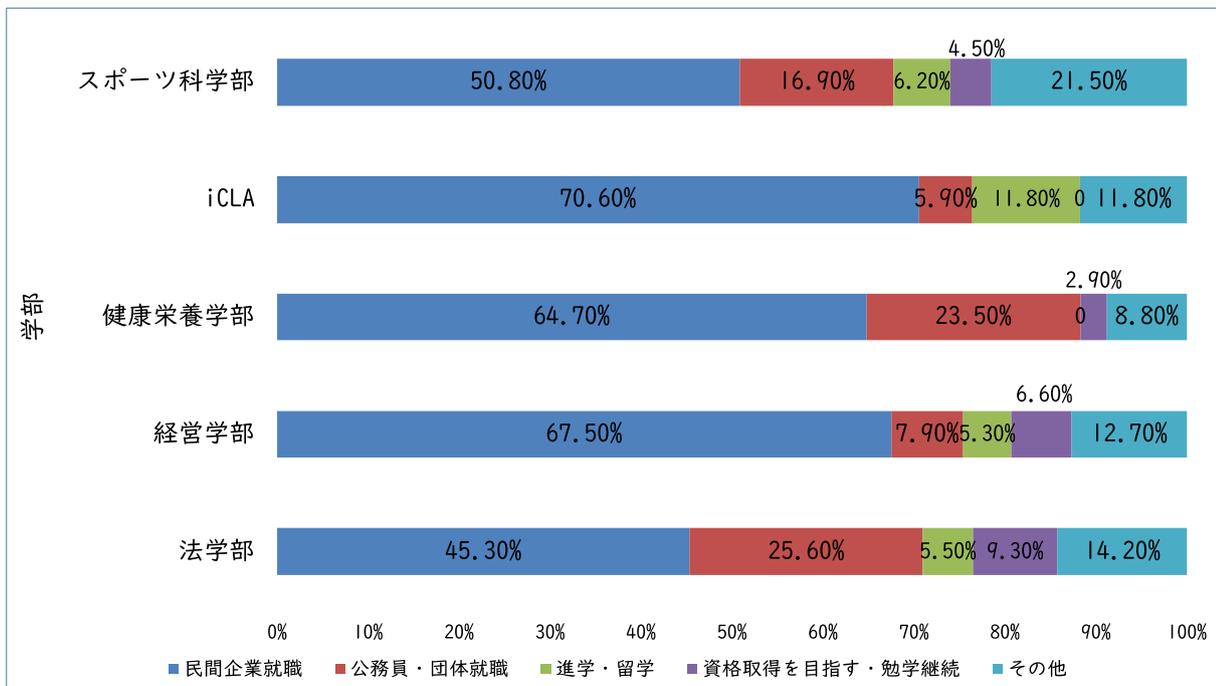


図1 卒業後の進路について（全体）

図1は「大学卒業後の希望(or 決めた)進路」を示した円グラフである。2022年度と同様の傾向が見られ、全体としては「民間企業」が54.9%で最も多く、次に「公務員・団体」が17.6%、「その他」が15.2%、「資格取得を目指す・勉学継続」が6.8%、「進学・留学」が5.5%となっている。

● 学部別に見た卒業生の進路（図2参照）



注：カイ2乗検定 $p < .001$

図2 卒業後の希望(決めた)進路について（学部別）

学部別で見ると、学部間で差がある。卒業後の進路について、まず、「民間企業就職」と考えた卒業生は、iCLAが最も多く70.6%となり、法学部やスポーツ科学部の2学部との間で20%~25%の差が見られる。次いで経営学部が67.5%、健康栄養学部が64.7%になった。

また、「公務員・団体就職」と回答した卒業生の中で、法学部が最も多く25.6%を占め、次に健康栄養学部が23.5%、スポーツ科学部が16.9%、経営学部が7.9%、iCLAが5.9%の順になった。法学部、健康栄養学部、スポーツ科学部の3学部の間では大きな差はないが、経営学部とiCLAは、他の3学部に比べて低い傾向が見られている。

第2部 大学の学習環境や教育サービスに関する評価

以下の6つの観点から大学での学習環境や教育サービスに対する評価を尋ねたところ、「4. やや当てはまる」「5. 当てはまる」の割合でランク付けすると以下の通りとなった。

表1 大学の学習環境や教育サービスに関する評価

	割合	順位
素敵な先生に出会うことができた。	84.1%	第1位
少人数・ゼミ形式の授業で学びを深められた。	78.8%	第2位
キャンパスの施設は学習環境としてよかった。	77.4%	第3位
大人数の講義形式の授業で学びを深められた。	76.0%	第4位
生活・学習・経済・就職等の学生支援が充実していた。	73.4%	第5位
部活やサークル活動及び国際交流等の課外活動が充実していた。	64.5%	第6位

2022年度と同様に、本学の教育サービスに対する卒業生の評価から、「学生と教員との繋がり」が最も評価されていると分かった。さらに、「素敵な先生に出会うことができた」という項目では、学部ごとに評価に差が見られた。肯定的な回答、「4. やや当てはまる」「5. 当てはまる」を選んだ割合は、健康栄養学部が97.1%で最も高く、100.0%に達した。これに続くのはスポーツ学部の96.6%、iCLAの94.1%、経営学部の83.4%、そして法学部の75.0%である。

一方、部活やサークル活動及び国際交流等の課外活動の充実度に関する評価は、全評価項目中で最も低くなっている。学部別で見ると、学部間で差がある。「4. やや当てはまる」「5. 当てはまる」と肯定的回答したのは、スポーツ科学部が80.8%で最も高く、iCLAが70.6%、健康栄養学部が67.7%、法学部58.8%、経営学部が58.1%の順となった。実践型人材を育成するためには、卒業前に多様な課外活動に経験させる機会を学生に提供する必要があると示唆できる。

第3部 身につけるべき能力・技能・資質（DPの達成度）に関する評価

学生に何を教えたかよりも、学生が大学4年間でどれだけ知識・技能・資質を修得し成長したかが重要であり、学生本位の教育が求められている。卒業生がディプロマポリシー（DP）に対し、どのくらい達成したと考えているかを測定するため、本学のDPに基づき設問を設けた（図3参照）。

(1) 全体から見たディプロマポリシー全学共通（DP）の達成度

全体から見たディプロマポリシー全学共通（DP）の達成度について、卒業時に「本学での学習生活によって、以下の知識・技能・資質などが身についたかどうか」と尋ねた結果、「当てはまる」「やや当てはまる」との回答を合算すると、「自己を理解し、適切な目標を設定し、達成するまでやり抜く力が身についた」と「ものごとを批判的に吟味・検討・改善する力と自己管理をする力が身についた」の2項目が84.7%で最も卒業生に評価されていることがわかった。次いで、「計画・立案・協調・行動する力や挑戦する力が身についた」が82.4%、「学んだ知識・技能を用いて、社会の問題解決に寄与する力が身についた」が79.5%、「異なる価値観を尊重し、複数の言語で周囲と意思疎通・協働する力が身についた」が76.7%の順であった。全体から、7割以上の卒業生が、本学に求めるディプロマポリシーが達成されたと肯定的に評価しているとうかがえる。

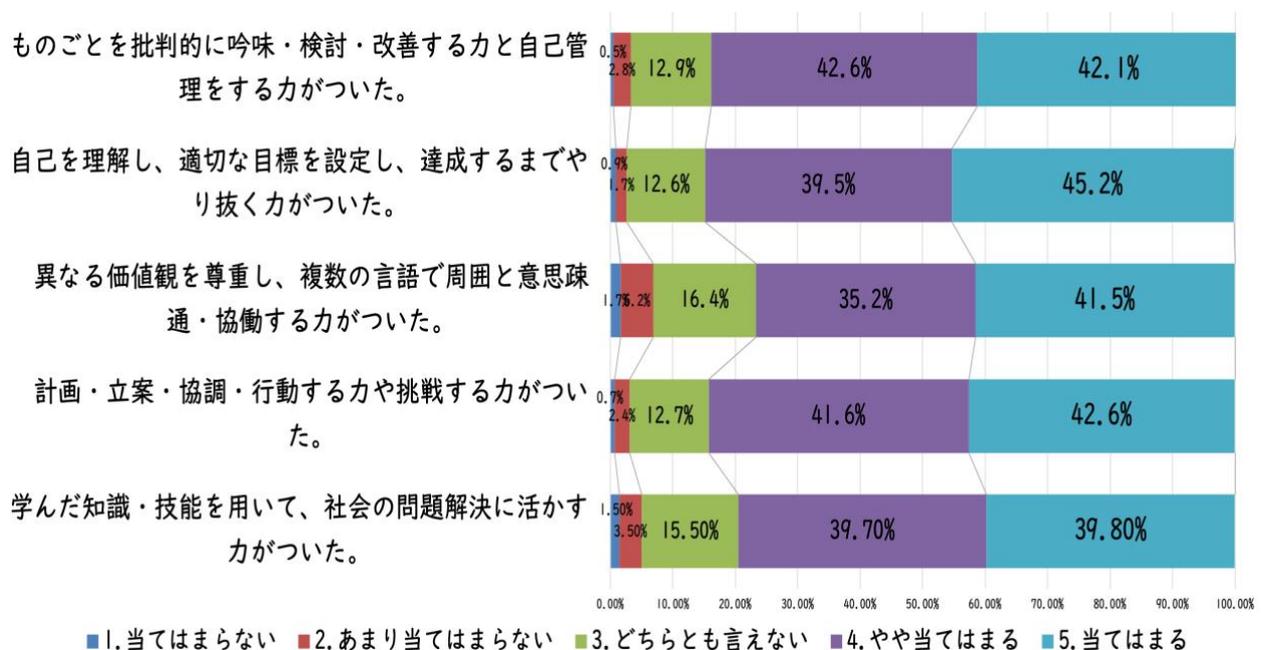


図3 身につけるべき資質・能力（DPの達成度）に関する卒業生自己評価

(2) 学部別見たディプロマポリシー (DP) の達成度

全学共通のディプロマポリシー (DP) の達成度について、学部間の違いを明らかにするために分析を行った。この分析には一元配置分散分析を用い、有意差が見られた場合にはScheffe法による多重比較を実施した。分析の結果は表2にまとめられている。

表2 学部別DPの達成度に関する一元配置分散分析

	全体		法学部		経営学部		健康栄養学部		スポーツ科学部		国際リベラルアーツ学部		F/p	多重比較
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD		
学んだ知識・技能を用いて、社会の問題解決に活かす力がついた。	4.13	3.98	1.02	4.14	0.85	4.56	0.56	4.24	0.79	4.53	0.51	5.458、 p<0.001	健康>法	
計画・立案・協調・行動する力や挑戦する力がついた。	4.23	4.09	0.87	4.20	0.83	4.62	0.49	4.42	0.70	4.41	0.51	7.116 p<0.001	健康>法、ス	
異なる価値観を尊重し、複数の言語で周囲と意思疎通・協働する力がついた。	4.09	3.89	1.08	4.12	0.96	4.44	0.75	4.28	0.77	4.59	0.62	7.167 p=0.001	健康>法、ス	
自己を理解し、適切な目標を設定し、達成するまでやり抜く力がついた。	4.26	4.17	0.90	4.21	0.83	4.56	0.61	4.41	0.65	4.47	0.62	4.070 p=0.003	ス>法	
ものごとを批判的に吟味・検討・改善する力と自己管理をする力がついた。	4.21	4.14	0.86	4.16	0.81	4.53	0.51	4.29	0.77	4.65	0.49	3.772 p=0.005	差異なし	

有意水準は5%以下は統計的に差が検証される。

表2に示されるように、「学んだ知識・技能を用いて、社会の問題解決に寄与する力が身についた」では健康栄養学部 (M=4.56) が法学部 (M=3.98) を上回り、「計画・立案・協調・行動する力や挑戦する力が身についた」では健康栄養学部 (M=4.62) が法学部 (M=4.09) を上回り、「異なる価値観を尊重し、複数の言語で周囲と意思疎通・協働する力が身についた」では健康栄養学部 (M=4.44) が法学部 (M=3.98) とスポーツ科学部 (M=4.28) を上回るなど、3つのDP項目において健康栄養学部が法学部やスポーツ科学部と比較して有意に高いDP達成度を示している。また、「自己を理解し、適切な目標を設定し、達成するまでやり抜く力が身についた」では健康栄養学部 (M=4.60) が法学部 (M=3.96) と経営学部 (M=4.05) を上回っている。

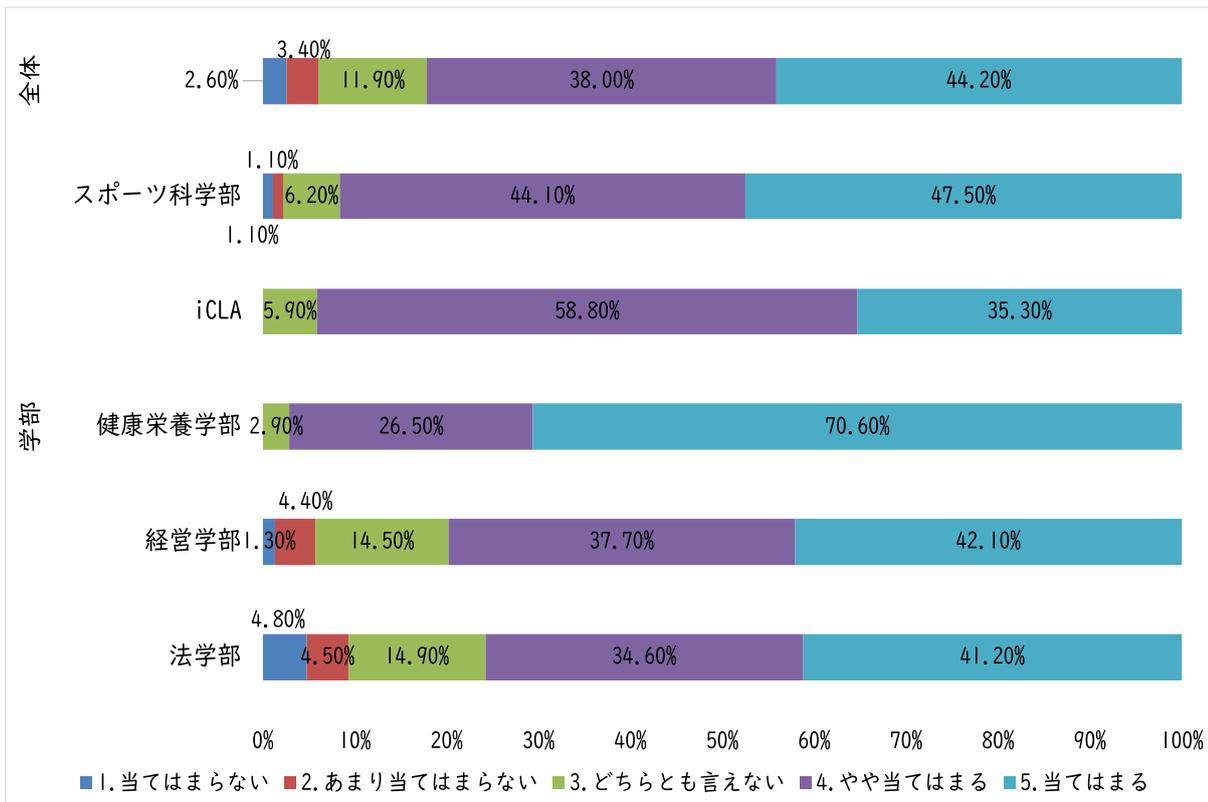
一方で、経営学部とiCLAは上記4つのDP項目を巡る達成度において、他の学部との間で有意差が見られない。さらに、「異なる価値観を尊重し、複数の言語で周囲と意思疎通・協働する力が身についた」の項目においても、学部間で有意差は確認されていない。

この分析結果から、特定のDP項目において学部間で達成度に差があることが示されており、学生がこれらの資質をどの程度修得しているかは学部によって異なるということがうかがえる。

第4部 大学学習全体の有用性について

本学での学習全体が「自分の目標を見つけること」や「自分が打ち込みたいことを見つけるきっかけとなったか」という観点から、本学の教育（学習全体）の有用性を卒業生に尋ねた結果、「当てはまる」「やや当てはまる」との回答を合算したところ、約8割の卒業生が本学の教育に対して肯定的に評価していることがわかった。

(1) 自分の目標を見つけるきっかけになったことから見る大学教育の有用性



注：カイ2乗検定 $p = .001$

図4 大学の授業や活動は、自分の目標を見つけるきっかけになった

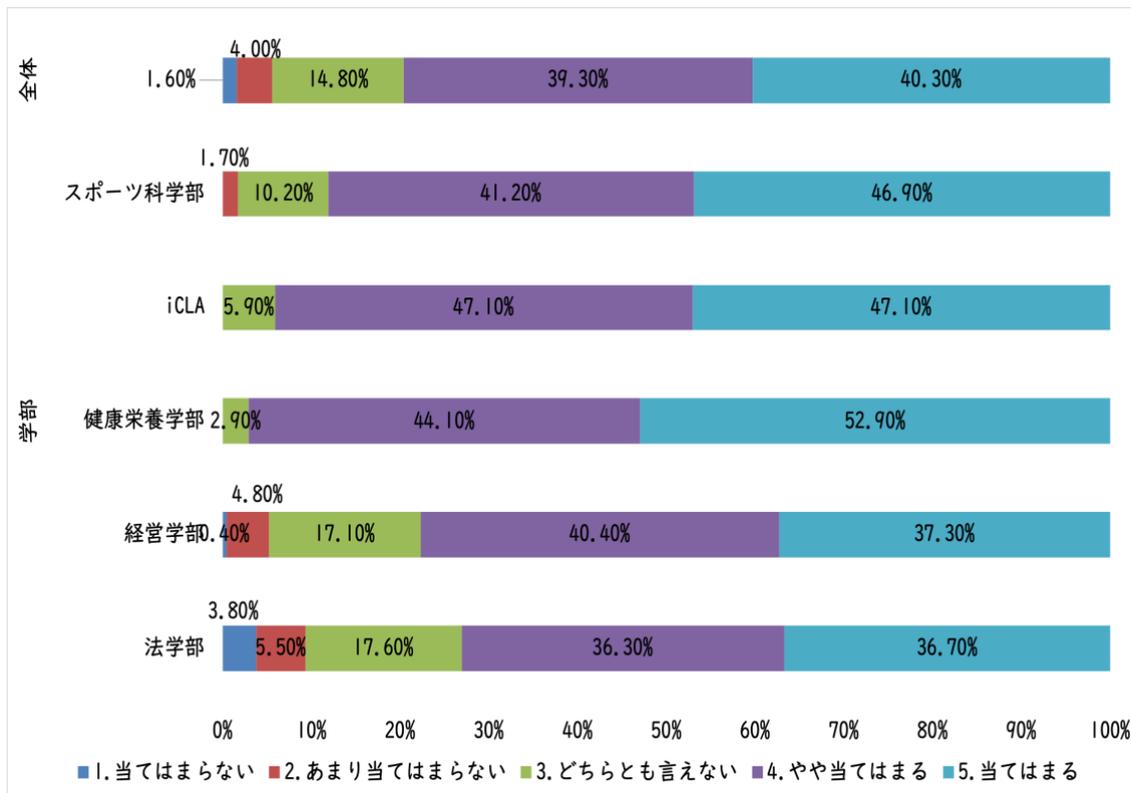
● 全学部で見た大学学習全体の影響（図4）

本学での学習（授業や活動等）は、自分の目標を見つけるきっかけになったのかを尋ねたところ、「当てはまる」と回答した卒業生は全体の44.2%で最も多く、「やや当てはまる」が38.0%で続いた。その他、「どちらとも言えない」が11.9%、「あまり当てはまらない」が3.4%、「当てはまらない」が2.6%という結果であった。「当てはまる」「やや当てはまる」の両者を合わせた割合は82.2%となり、10人のうち約8人の卒業生は本学の授業や活動が、自分の目標を見つけるきっかけになったと肯定的な評価をしていることがわかった。

● 学部別に見た大学での学習の影響（図4参照）

学部別による差があるかどうかについて、カイ2乗検定を行ったところ、統計的有意差が検証された。「当てはまる」「やや当てはまる」と肯定的に回答したのは、健康栄養学部が97.1%で最も高く、次いでiCLAが93.1%、スポーツ科学部が91.6%、経営学部が79.8%、法学部が75.8%の順となった。これにより、健康栄養学部の卒業生は、他の4学部と比べて、大学教育の有用性をより高く評価していることが示された。

(2) 自分が打ち込みたいことから見る大学教育の有用性



注：カイ2乗検定 p=.003

図5 大学の授業や活動は、自分が打ち込みたいことを見つけるきっかけになった

● 全学部で見た大学学習全体の影響（図5参照）

本学での学習全体（授業や活動等）が「自分が打ち込みたいことを見つけるきっかけになったか」という質問に対して、「当てはまる」と回答した卒業生は全体の40.3%で最も多く、「やや当てはまる」が39.3%で続いた。また、「どちらとも言えない」は14.8%、「あまり当てはまらない」は4.0%、「当てはまらない」は1.6%であった。「当てはまる」「やや当てはまる」の回答を合わせた割合は79.6%となり、10人中中約8人の卒業生が本学の授業や活動が自分が打ち込みたいことを見つけるきっかけになったと肯定的に評価していることが示された。

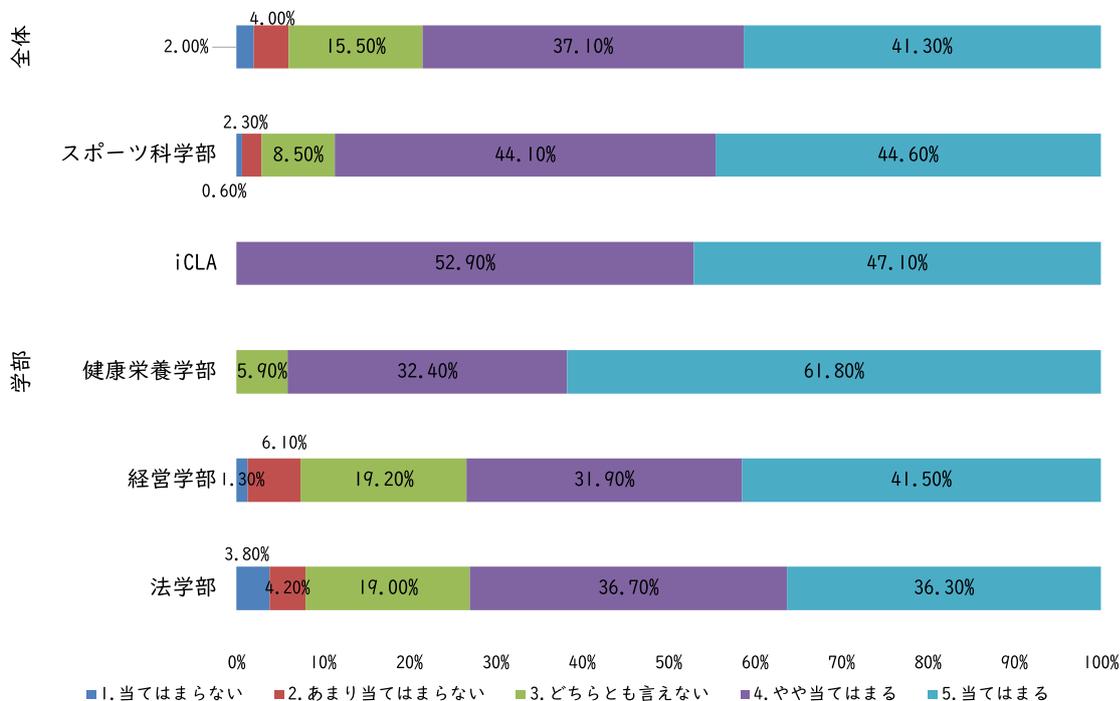
● 学部別に見た大学での学習の影響（図5参照）

学部別による差があるかどうかについて、カイ2乗検定を行ったところ、統計的有意差が検証された。「当てはまる」「やや当てはまる」と回答したのは、健康栄養学部が97.0%で最も高く、次にiCLAが94.2%、スポーツ科学部が88.1%、経営学部が77.7%、法学部が73.0%となった。2022年度と同様に、健康栄養学部の卒業生が他の4学部比べて大学教育の有用性をより高く評価していることがうかがえた。

第5部 本学の総合評価と愛着度について

(1) 大学教育への満足度（図6参照）

図6は「卒業生から見た大学満足度」を示した横棒グラフである。本学の教育全般に対し、「満足している」が41.3%、「やや満足している」が37.5%と回答した卒業生を合計すると、全体の77.8%が本学の教育に肯定的な評価をしていることが明らかになった。学部別に見ると、学部間に差が存在する。iCLAが100.0%で最も高い満足度を示し、次に健康栄養学部が94.2%、スポーツ科学部と法学部が同じく88.7%、経営学部が73.4%、法学部が73.0%と続いている。

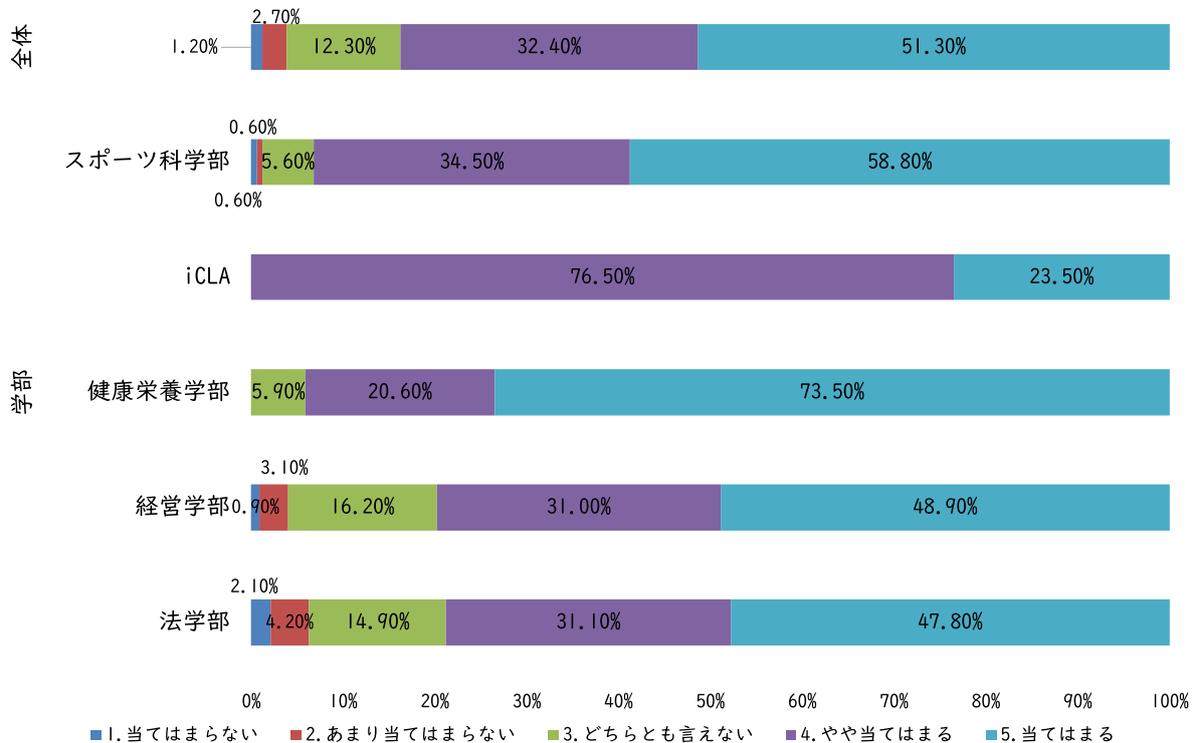


注：カイ2乗検定 $p < 0.001$

図6 卒業生から見た大学教育の満足度（全体と学部別）

(2) 本学への投資価値

◆ 山梨学院大学に入学してよかったと思える卒業生の比率 (図7参照)



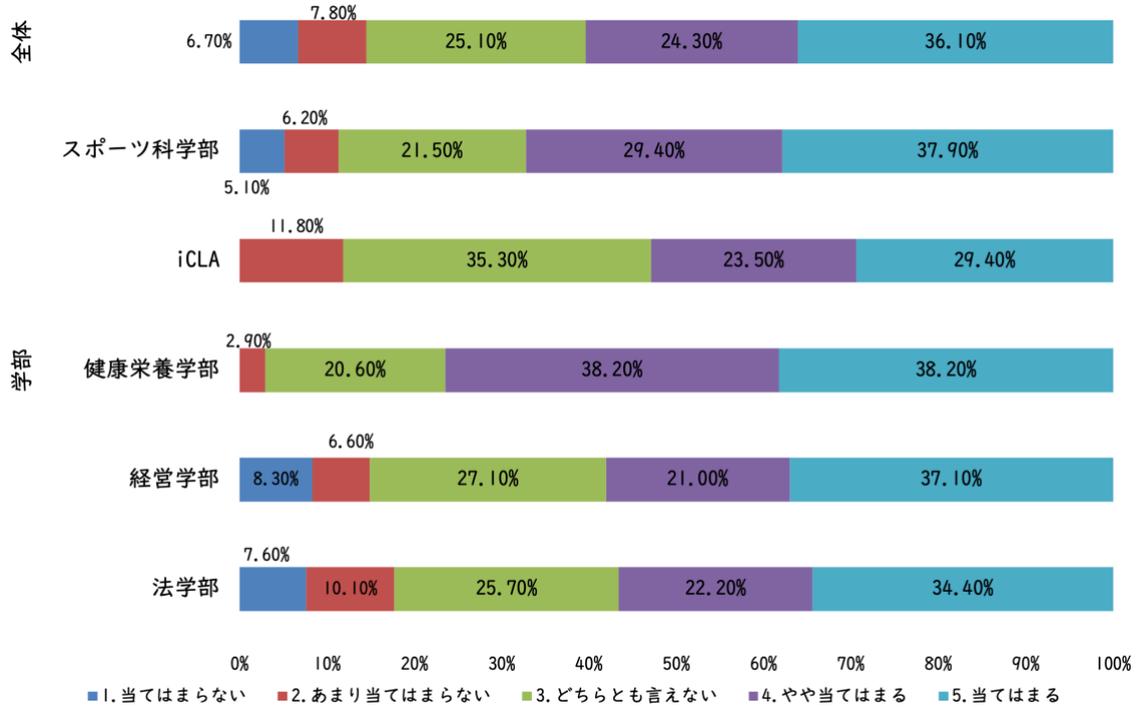
注：カイ2乗検定 $p < 0.001$

図7 本学に入学してよかったと思える卒業生の比率 (全体と学部別)

83.7%の卒業生は、山梨学院大学に入学してよかったという肯定的な評価をしていることがわかった。学部別で見ると、学部間で差がある。iCLAが100.0%で最も高く、その次に健康栄養学部が94.1%、スポーツ科学部と法学部が93.3%、経営学部が79.9%、法学部が78.9%となっている。

◆ 仮に再度選択できるならば、同じ大学を選択したいか (図8参照)

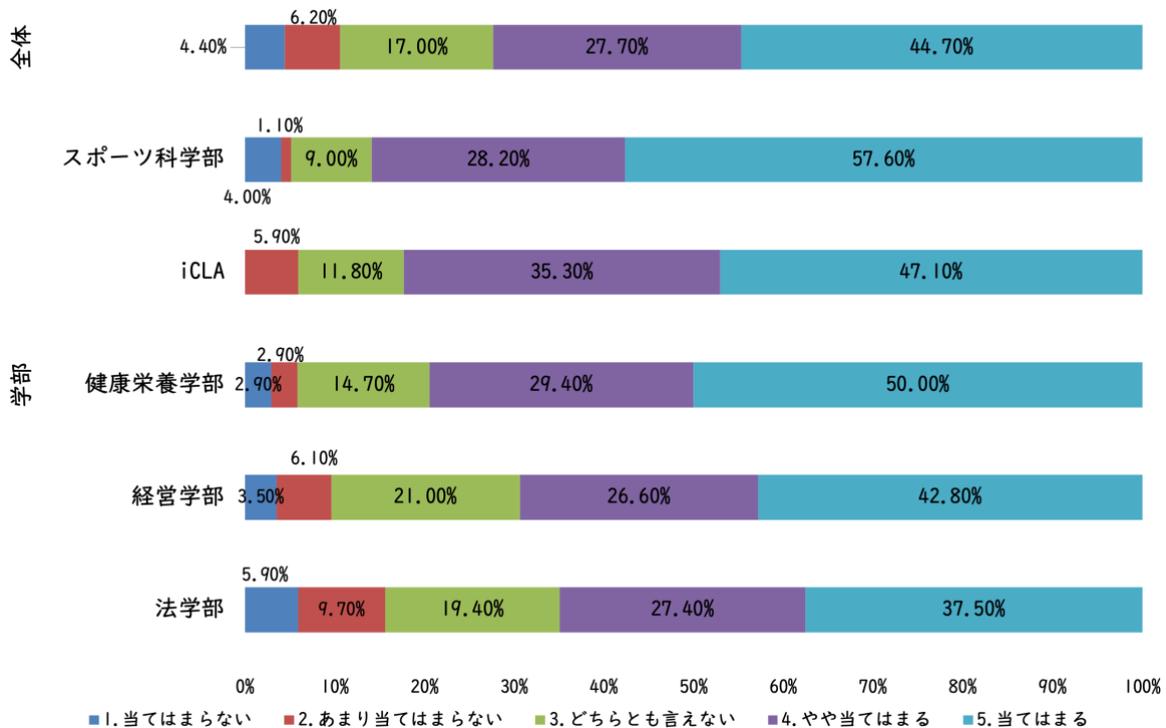
再度18歳時点に戻ることができると仮定したら、同じ大学を選択するか尋ねたところ、「選択したい」(36.1%)と回答する卒業生が最も多く、次いで「やや選択したい」が24.3%、「どちらとも言えない」が25.1%、「あまり選択したくない」が7.8%、「選択したくない」が6.7%の順となった。「選択したい」「やや選択したい」を合わせると、本学を再び選択すると回答した卒業生は約6割となった。一方、学部別に見ると、この点については学部間の差が検証されなかった。



注：カイ2乗検定 $p = .277$

図8 仮に再度選択できるならば、同じ大学を選択したいか（全体と学部別）

◆ 仮に再度選択できるならば、同じ学部を選択したいのか



注：カイ2乗検定 $p < 0.05$

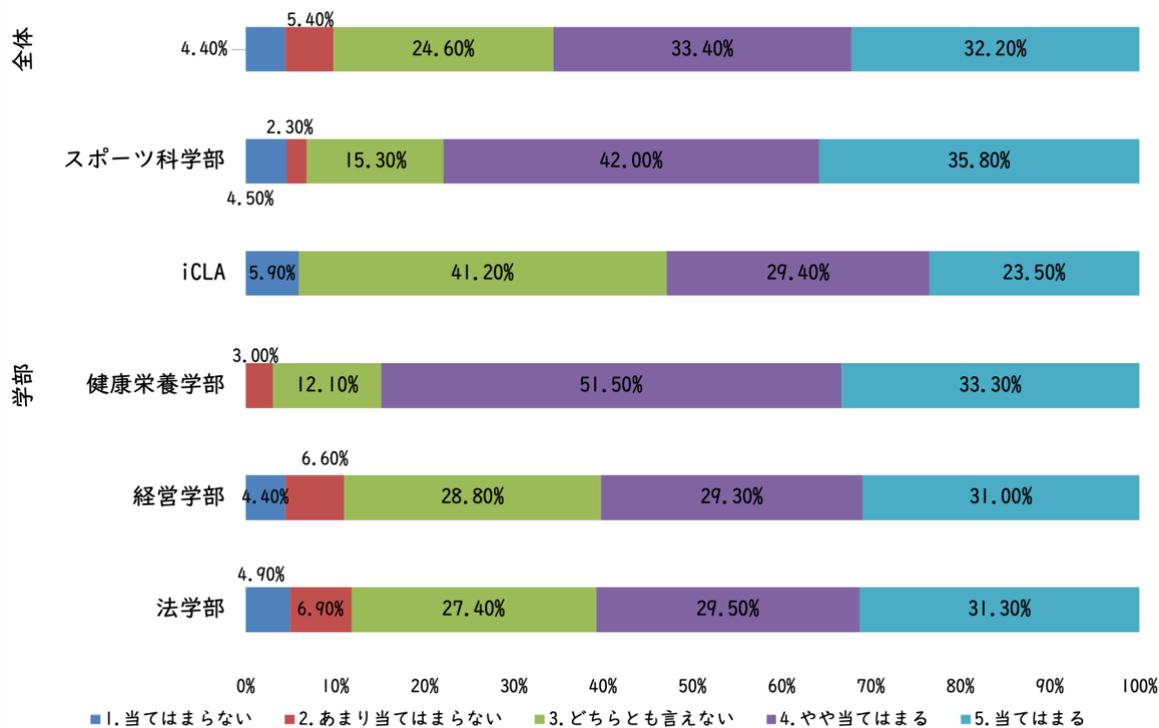
図9 仮に再度選択できるならば、同じ学部を選択したいのか（全体と学部別）

再度同じ専門分野を選択するかについて尋ねた結果、「選択したい」と回答した割合は44.7%であり、「やや選択したい」と回答した割合は27.7%であった。これらを合わせた割合は72.4%となり、10人中約7人の卒業生が自分の専門選択に後悔しておらず、本学が提供する専門教育に対して肯定的な評価をしていることが示される。

学部別の差についてカイ2乗検定を行ったところ、統計的に有意な差が検証された。特に、スポーツ科学部（85.8%）とiCLA（82.4%）からの卒業生が最も高く評価していることが明らかになった。

(3) 本学への愛着度（図10参照）

本学への愛着度に関しては、他の人に進学を推薦するかどうかを尋ねたところ、「やや推薦する」と回答した割合は33.4%、「推薦する」と回答した割合は32.2%であり、ほぼ同数であった。「どちらとも言えない」と回答した割合は24.6%である。これらの回答を合わせた割合は65.6%となり、10人中約6.5人の在学生在が母校に対して愛着を持ち、他人に本学への進学を推薦する可能性があるかと推測される。学部別の差についてカイ2乗検定を行った結果、統計的に有意な差が検証され、特に健康栄養学部では他人に本学への進学を推薦する可能性が84.8%となり、他の4学部よりも高い愛着度を持っていることが示された。



注：カイ2乗検定 $p < 0.05$

図10 大学を後輩や周りの知り合いに推薦したいのか（全体と学部別）

令和5年度
山梨学院大学 卒業時調査

発行日付：2024年3月

発行部署：学習・教育開発センター

作成担当：潘秋静

倉澤一孝

協力部署：iCLA事務局 Love Ryan

教務課